

## 日本語の所有文の獲得について\*

松 藤 薫 子

日本獣医生命科学大学 英語学教室

**要 約** 本論文では、日本語の所有文に焦点を当て、所有を表すときに使う典型的な文を子どもから引き出す調査結果に基づき、所有文の獲得過程を考察した。典型的な所有とは、所有者が人間である、所有物が価値ある無生物である、所有者と所有物の間に近接関係がある、所有者は所有物の独占権がある、所有関係が長期にわたるといふ全特徴を満たすものとする。今回の調査により明らかになった点は以下の(1)から(4)である。(1) 典型的な所有を表す「所有者には所有物がある」といふ文の所有者につく助詞「には」は5歳9ヶ月ごろに使うことができる。(2) 人が物を手に持ったり身に着けたりしていないが、物を所有している場面で、典型的な所有を表す「所有者は所有物を持っている」といふ文は5歳1ヶ月ごろには発話できるようになっている。(3) 「ある」文と「持っている」文が両方使える場面では、「持っている」文のほうが4、5歳の子どもは使いやすい。(4) 「所有者には所有物がある」が使われた文脈では、所有者につく格助詞は「には」より「は」や格助詞の省略のほうが、4、5歳の子どもは使いやすい。

さらに、上記の子どもの発話の誘出調査と松藤(2015)の自然発話資料調査の両方の分析結果に基づき、日本語の所有文の獲得過程の特徴を明らかにした。そして、その獲得過程で (i) 所有の概念獲得、(ii) 「子どもは形と意味の結びつきにおいて、1対1の結びつきを好む」(Slobin 1973, 1985) という言語獲得原理、(iii) 獲得過程の中間段階の文法の特徴が大人の文法の特徴に影響を与えるという普遍文法の動的な内部構成 (Kajita 1977, 1997) が関与していることを議論した。

キーワード：日本語の所有文、子どもの言語獲得、動的な文法理論

日獣生大研報 67, 18-29, 2018.

## 1. はじめに

所有は、人間にとって基本的な概念である。7万年前から、アフリカにいた中期旧石器時代の後期の頃の現生ホモ・サピエンスに近い人たちは、すでに所有や所有権の概念を持っていたと推測される。今も昔もどの言語を話す人にも生活を営む上では、所有は重要で普遍的な概念である (池上 2006:166)。

所有の概念は、言語の基本的な操作の基であるという可能性が指摘されている。貴重品の実際の物理的・所有および管理とその根底にある所有の概念および操作 (例: 「ヒト A が貴重品 v1 を A のものとし、隣の集団 W との戦いで戦利品 v2 を略奪して A のものとする」) が、私たち共通の普遍的な言語的知識の中にある「二つの要素を取ってきて、それらをひとつのまとまりにせよ」といふ併合の直接的な前駆体であると主張されている (池内 2010:119-124)。

所有の概念は言語で表現される場合があり、その表現形式はさまざまだが、限定表現と叙述表現に大別できる。限定表現として「これは私のものだ」や叙述表現として「佐藤さんには高級外車がある」「佐藤さんは高級外車を持っ

ている」などがある。

言語を獲得していく子どもの周囲では、他人の所有しているものと自分の所有物を区別したり、家族レベルまたは集団や部族レベルで、他の家族や他の集団・部族の持ち物と自分の家族や集団・部族の所有物を区別したりするために、態度・ジェスチャー・言語表現が使われる。そして大昔の中期旧石器時代では、着物、剥片石器、狩猟記念としての獲物の一部 (記念物) などを他人のものと区別し、自分自身の所有物として所持・保有していたと想定できる。この時代、まだ作る石器の種類も多くなく、精巧なものが日常的に作られていなかったとされているため、また狩猟の効率がよくなかったとされているため、上記の物は「貴重品」であったと想定される (池内 2010)。所有物が「貴重品」であったことは、現代にも通じるところがある。

言語習得の初期段階には所有の表現がみられると報告されている (Brown 1973, Tomasello 1992, 松藤 1994, 等)。英語では、限定表現と叙述表現 (T 児の発話例: Mommy's shirt (1;5), Daddy have this wallet. (1;7) など (Tomasello (1992)) が使われる (( ; ) は (歳 ; 月) を表し、例えば (1;5) は 1 歳 5 カ月を示す)。日本語では限定表現 (C

児の発話例：「Cちゃんのくすり」(2;0)など松藤(1992)がみられるが、叙述表現に関する報告はほとんどない。

所有は認知的にも言語的にも基本的な概念であるようだが、子どもは言語発達初期に叙述的に文で言語表現できるようになるのだろうか。本論文は、日本語の叙述所有表現(以下、所有文)に焦点を当て、子どもの所有文の誘出調査に基づき、その獲得過程を考察することを目的とする。2節では日本語の所有文の特徴(松藤2017)を概観し、3節では自然発話資料から観察された子どもの所有文の特徴(松藤2015)を示す。4節では、3節では観察されなかった点を確認するために行った調査の方法や結果を示す。5節では、3節と4節で示す日本語の所有文の獲得過程の特徴を整理し、その獲得過程を支えるメカニズムとはどのようなものかを考察する。6節では本論文の結論を述べる。

## 2. 日本語の所有文

本論文では、所有の概念は(1)のようなTaylor(1996)、Heine(1997)が用いた家族的類似性に基づき、「所有者人間と所有物である価値ある無生物が近接関係にあり、所有者は所有物の独占権があり、所有関係が長期にわたる」という全特徴を満たすものを典型的な所有関係、それから逸脱するものを非典型的な所有関係と捉える。このような所有関係を表す日本語の所有文として(2)のような文がある。

### (1) POSSESSION

- a. The possessor is a human being.
- b. The possessed is an inanimate entity, usually a concrete physical object of value.
- c. The possessor has the exclusive rights to make use of the possessed.
- d. The possessed is located in the proximity of the possessor.
- e. The possession relation is long term.

(Taylor 1996:340, Heine 1997:38-9)

- (2) a. 佐藤さんには夫がいます。
- b. 佐藤さんには才能があります。
- c. 佐藤さんは熱があります。
- d. 佐藤さんはきれいな目をしています。
- e. 佐藤さんは外車を持っています。
- f. 佐藤さんには高級外車があります。

(庵, 他 2012:36-37)

本論文では、(2e)(2f)のように、所有者は「人」、所有物は外車のような「具体的物体」である所有文を扱う。所有者「人」と所有物「具体的物体」NP(Noun Phrase 名詞句)を含む所有文の基本的な形式は、「人はNPを持っている」「人にはNPがある」となり、所有者「人」に続く助詞には他の助詞がみられる場合がある。(「人がNPを持っている」「人にNPがある」「人はNPがある」)。

大人の言語知識において、「弟に財布がある」(Martin 1975:649, Stassen 2009:302)「ジョンに帽子がある」(Tsujioka 2002:30)などが先行研究では所有文の例文とし

て用いられている。そのような例文は自然な文なのか、(2e)と(2f)のような所有文は同程度に自然なのか、所有物はどのような物が自然なのかなどを検討するために、松藤(2017)では、大学生160人のアンケート調査を行った。その結果、人間が具体的物体を所有していることを叙述的に表現する形式は、(3a)(3b)(3c)の順で自然さが増すことを明らかにした。

### (3) a. 人にはNPがある

b. 人にはNPがある + a (前文を発話する理由が推察できる文)

c. 人はNPを持っている

(3)の具体例は(4)のような文である(松藤2017:(4)の自然さの割合は(4a) 65.62%, (4b) 66.25%, (4b') 75.25%, (4c) 89.37%)。

### (4) a. 佐藤さんには高級外車がある。

b. 佐藤さんには高級外車があり、友達からうらやましがられている。

b'. 佐藤さんにはオートバイがあり、伊藤さんには外車がある。

c. 佐藤さんは高級外車を持っている。

人間が物を所有していることを言語表現することとは、単に所有関係を描写するだけでなく、(4b)のように聞き手に所有者のプラス評価を伝えたり、(4b')のように対比の効果を与えたりすることである。

所有物に関しては、多くの人が所有していない貴重品(資産価値がある物、高価な物、珍しい物、手に入れにくい物、目立つ物、うらやましいと感じさせる物、誇れる物、プラス評価を与えるような物など)かつ大型の物のほうが典型的である。例えば、動詞「ある」を所有文で使用する場合は所有物が小型より大型の方がやや自然である(松藤2017:小型 55.00% < 大型 65.62%)。

注意すべき点は、(3a)は、所有物が具体的物体よりも抽象的属性(例：「才能」「情熱」など)であるほうが典型的に使われる(庵, 他 2012:36-37)。例えば、「彼には才能がある」などである。(3c)に関しては、所有文と同様の形式で、「動作主が主題を持っている」という意味が結びつく場合、例えば「私は懷中に大金を持っている」は所有ではなく携帯・所持を表す。

## 3. 自然発話資料から観察された所有文:松藤(2015)

松藤(2015)では、口頭言語のデータベース CHILDES(チャイルズ、Child Language Data Exchange System)から日本語児2人の発話データをCLAN(Computerized Language Analysis)プログラムのKWAL(Key Word and Line)コマンドで特定の単語を探し分析した(MacWhinney 2000, 宮田 編 2004)。一人は野地(1973-1977)に基づくS児(0;0-6;11)のデータで、もう一人は、MiiProコーパスの一部であるN児(1;2-5;0)のデータである(Nisisawa & Miyata 2009)。

松藤(2015)に基づき、所有文「ある」文と「持っている」

文がいつごろから使われ始めたのか、所有者につく助詞や所有物につく助詞、所有物の内容が、大人と同様の使用なのかを概観する。

所有文「ある」文においては、人間や動植物が「具体的属性」を備えていることを表す文や人間が「具体的物体」を所有していることを表す文がS児もN児も2歳台から使われ、使用当初は人間や動植物の具体的属性の具備を表す文の使用頻度が多かった。(5)(6)が発話の具体例である(‘ ’の中味は子どもの発話内容を大人が言った場合の参考例である)。

(5) S児 a. 具体的属性： とうちゃん はは ある？ ‘とうちゃん 歯がある？’ (2;1)、これ がが ある ‘魚に骨がある’ (2;1)、りんごは たね あるんじゃね (2;8)、おかあちゃん ちょうちょう おてて ある ‘おかあちゃん 蝶蝶にお手手がある’ (3;3)、あしも はえてないのにね しっぽだけ あるの とったよ (6;5)、ぎざぎざがある (6;5)

b. 具体的物体： せいじちゃん ある ‘せいじちゃんには麦わら帽子がある’ (2;2)、ほく おかね あるんよ (2;10)、おとうちゃん ほく いい おようふくが あるんよ (3;0)、おばあちゃん おかねが たくさん あるの (4;0)、おかあちゃん おんなでもねえ あかとしろの ぼうしがあるんよ (5;0)

(6) N児 a. 具体的属性： ふたつ あんよ あるの ‘ゴリラには二本足があるの’ (2;7)、おとうさん ここに まゆまゆげと こういのが あるね (3;11)、なんで だんごむしが あしが いっぱい あるの？ (4;0)

b. 具体的物体： なっちゃん これ と これ とー これとか これとか これと これとか これとかー ある (3;4)、こっちは もう ヌットラが あるんじゃない？ ‘私たちにはもうドラゴンヌットラがあるんじゃない？’ (4;6) (松藤 2015:40-41)

(5) はS児の発話例で、(5a)は人間、魚、果物、昆虫、植物が具体的属性として歯、骨、種子、手、しっぽ、ぎざぎざを具備していること、(5b)は人間がおかね、衣類、帽子を所有していることを表す例である。(6)はN児の発話例で、(6a)は動物、人間、昆虫が具体的属性として足、眉毛を具備していること、(6b)は人間が指示物(妹によって描かれたキャラクターの紙)を所有していることを表す例である。

所有者につく助詞に関しては、大人の言語知識では、「佐藤さんには/に/は高級外車がある」のように「には」「に」「は」が使用可能である。「には」がよく使われ、次に「に」、「は」は使用に制限がある。「に」は単文での使用よりも埋め込み節での使用のほうが自然である(例：「佐藤さんに家宝がある」<「佐藤さんに家宝があることは前からわかっていた」)。「は」は熱などの抽象的属性の具備の場合に最も使われる(例：「佐藤さんは熱がある」)。価値のある多量・大型の物体の所有の場合にも使える場合がある。(例：「あの人はお金がたくさんある」(Plaut

1904:259, Stassen 2009:433(3a)),「佐藤さんは高級外車があつていいわね」)。

S児とN児によって所有者が表されている所有文とS児とN児によって場所が表されている存在文を対象に、どのように格助詞が使われているかを調べた。その結果をまとめたものがTable 1である。

Table 1. 「ある」を含む所有文/存在文の格助詞の使い方(松藤 2015:38)

	所有文		存在文	
	S児	N児	S児	N児
該当する発話文数(100%)	28(100%)	10(100%)	239(100%)	36(100%)
に	1(3.6%)	0(0%)	189(79%)	29(80.6%)
には	0(0%)	0(0%)	1(0.4%)	1(2.8%)
は	6(21.4%)	2(20%)	0(0%)	0(0%)
その他	2(7%)	3(30%)	11(4.6%)	3(8.3%)
格助詞なし	19(68%)	5(50%)	38(16%)	3(8.3%)

「ある」を含む文の使用では、所有文より存在文のほうが多く発話されている(S児:所有文28 vs. 存在文239, N児:所有文10 vs. 存在文36)。所有文では、所有者に関して格助詞が使われない場合が半数以上である。「は」が8例、「に」は1例、「には」は全く使われていない。一方、存在文では、「に」が8割以上使われている(全ての存在文の中で、「に」「には」、その他に入る「にも」が使われた存在文が8割以上を占める)。

「に」が使われた1例が(7)で示した発話例である。所有者に「に」がつくのはこの1例のみだった。(8)は「に」が使われている存在文の発話例である(格助詞に引いた下線は筆者による)。

(7) 所有文： おかあちゃん きかんしゃに えんとつがあるんじゃね (S児 2;10) (松藤 2015 : 38)

(8) 存在文： a. たくちゃん あめちゃん もっていたのどこに あるの (S児 2;4) b. あそこに ある (S児 2;4) c. ものさし、てっぽう 売つてるところに こま あるんじゃね ‘てっぽう；鉄砲’ (S児 2;10) (松藤 2015 : 39)

格助詞「は」に関しては、(9)のような所有文では多少使われ、存在文では全く使われていなかった。

(9) 所有文「は」： たいたいは ががが あるからね ‘魚は骨があるからね’ (S児 2;8) (松藤 2015 : 38)

所有者を人間に限定すると(10)のように「は」2例、「でも」1例が観察され、「に」は全くみられなかった。

(10) おとうちゃん は たくさん あるね ‘おとうさんはたくさんインクがあるね’ (S児 2;8) おかあちゃん おんなでもねえ あかとしろの ぼうしが あるんよ (S児 5;0) こっちは もう ヌットラが あるんじゃない？ ‘私たちにはもうドラゴンヌットラがあるんじゃない？’ (N児 4;6)

所有物につく「が」に関しては、S児2歳9ヵ月から、N児3歳0ヵ月から観察できた。

その発話例が(11)である。

(11) ぼく おねつが ある (S 児 2;9) (松藤 2015: 40) これちんが あるんです 'N 児 (仮想のぼく) にはちんちんがあるんです' (3;0) (松藤 2015: 37)

所有物として本論文で焦点を当てている具体的物体に関しては、S 児と N 児が使った (5b)(6b) の発話例から挙げると「おかね」「おかねがたくさん」「いいおようふく」「あかとしろのぼうし」「これとこれとこれとか」「ヌットラ」がみられた。

「持っている」文は携帯文はみられたが、所有文は全く観察されなかった。(12)(13) が携帯文の発話例である。

(12) S 児 a. 目の前の携帯: おかね もってるんよ (2;1)、かちゃ もってる '傘を持っている' (2;5)、ぼく おててもってるから (2;9)、おかあちゃん てるきちゃんが もってる ような こんなチョコレート ちょうだい (4;0)

b. 過去の携帯の出来事の思い出から: ね たかしちゃんも もってるんじゃけん こうて (3;9)、ありゃあ ね かずぼちゃんが もってる こんな まあるいのが いる ゆうて ないたんよ (4;0)

(13) N 児: きていちゃん なに もってんの? (2;4) ほらこれ もってんの (2;4) これ おててで もってる (2;11)

(松藤 2015:41)

(12a) は、目の前で物が携帯されていることを S 児が表現した発話例、(12b) は、目の前で起こっている出来事ではなく、友達が過去に物を携帯していたことを思い出して S 児が発話したものである。(13) では、N 児が絵本を見ながら、目の前の動作主の物の携帯の状況を表現している。「持っている」文はすべて携帯を表し、所有を表すことはなかった。

携帯文「持っている」の場合、大人の言語知識では、携帯者の格助詞は「は」「が」が使われる。S 児は携帯文 10 例があり、その内訳は、「が」の使用が 4 例、「も」の使用が 2 例みられ、残りの 4 例は格助詞の使用がみられなかった。2 歳後半から「も」、4 歳から「が」を使い始めるが、3 歳ぐらいまで格助詞を使うことがないという傾向がある。

携帯物が表現された発話例は S 児が 2 例、N 児が 4 例であり、携帯物につく「を」は両者ともに全く使わなかった。

携帯物の内容は身の回りのもの(食べ物、おもちゃ、日用品など)であった。表現としては、物の名前や「これ」が多く、「おかあちゃんのきもの」「こんなチョコレート」のような物にその属性が加えられた表現も見られた。

以上、自然発話の分析から明らかになった点は(14)、不明な点は(15)である。

(14) 明らかになった点

A. 「ある」所有文

- a. 2 歳台から使われ始めた。
- b. 人や動植物が具体的属性を備えていることだけでなく、人が身の回りのものを所有物とすることも表された。
- c. 所有物は単なる物の名前ではなく、(大人の使用と

似ていて) 少し目立つように修飾語のついた表現が用いられた。

d. 所有者につく格助詞は大人と異なり、使われないことが多かった。そして「には」は全く使われず、「は」が少し観察された。

e. 所有物につく「が」は 3 歳前後から観察された。

B. 「持っている」所有文: 観察されなかった。同じ形式で異なる意味を表す携帯文のみが観察された。

(15) 不明な点

a. 「ある」所有文で所有者につく助詞「には」はいつごろから使うようになるのか。

b. 人が物を手に持っていたり身に着けていたりしないが(物の携帯・所持ではなく)、物を所有している場合、「持っている」文を発話することができるのか。

## 4. 調 査

### 4.1 調査の方法

(15) を明らかにするために、保育園で所有文を引き出す調査を行った(2016 年 10 月)。調査者 1 人が被験児 1 人との対話形式を用い、一人につき約 15 分間で行った。状況を説明する場面の最後に所有文が使われ、その所有文を被験児が日本語学習中のくまさんに教えてあげるといった伝言ゲームのような方法である。

被験者は保育園児 32 人を対象にしたが、調査を最後まで行えた被験児は 28 人(2;8)-(6;1)であった。

所有者と所有物が省略されて伝言されないように対比的な表現を使用し、「所有者 1 には所有物 A があって、所有者 2 には所有物 B があります」が 4 例、「所有者 1 が所有物 A を持っていて、所有者 2 が所有者 B を持っています」が 4 例、所有者は人形(男子 2 体、女子 2 体)、所有物は所有者にとって大切な複数からなる(サイズの大きい)おもちゃ 4 種類、おもちゃのセット 4 種類を使用した。おもちゃは人形の手に持たせることや身に付けさせたりすることはせず、人形のそばに置いた。

(16) は状況説明の中で使われた所有文である。

(16) a1. 黄色君にはミニカーがあって、茶色君には新幹線があります。

a2. 黄色君にはドラえもんがあって、茶色君にはメダルがあります。

a3. 茶色君はミニカーを持っていて、黄色君は新幹線を持っています。

a4. 茶色君はドラえもんを持っていて、黄色君はメダルを持っています。

b1. 赤さんには宝石セットがあって、青さんにはお化粧セットがあります。

b2. 赤さんにはごはんセットがあって、青さんには食器セットがあります。

b3. 青さんは宝石セットを持っていて、赤さんはお化粧セットを持っています。

b4. 青さんはごはんセットを持っていて、赤さんは食器セットを持っています。

手順は、被験児が伝言ゲームのような方法に慣れて伝言できるように練習を2回行い、フィラー（意図が明確になりすぎないように、同じ内容文の繰り返しを避けるための息抜きとしてのつなぎ）を所有文を含むシナリオ2つの後に1回行い、合計で3回行う（Appendix 1 参照）。その順番は(17)である。

(17) 13 個のシナリオ：練習 1・練習 2・本番 1・本番 2・フィラー 1・本番 3・本番 4・フィラー 2・本番 5・本番 6・フィラー 3・本番 7・本番 8

(17) の本番の順番は(18)である。

- (18) 1. 黄色君にはミニカーがあって、茶色君には新幹線があります。
2. 青さんは宝石セットを持っていて、赤さんはお化粧品セットを持っています。
3. 赤さんにはごはんセットがあって、青さんには食器セットがあります。
4. 茶色君はドラえもんを持っていて、黄色君はメダルを持っています。
5. 青さんはごはんセットを持っていて、赤さんは食器セットを持っています。
6. 黄色君にはドラえもんがあって、茶色君にはメダルがあります。
7. 茶色君はミニカーを持っていて、黄色君は新幹線を持っています。
8. 赤さんには宝石セットがあって、青さんにはお化粧品セットがあります。

(19) は、調査の始めの部分のシナリオであり、Fig.1, Fig.2, Fig.3 は使われた人形やおもちゃの例である。

(19) シナリオ（シナリオ中の〇〇さんは被験児、マーさんは調査者を指す）

白くまさんは、今、〇〇さんが話す日本語を勉強中です。いろいろと教えてあげてくださいね。マーさんがここにあるぬいぐるみについてお話しします。

（練習 1）大きい象さんが小さい象さんを抱っこしています。〇〇さん、大きい象さんが何をしているのか、白くまさんに教えてあげてね。（白くまさんの鳴き声：グアーグアー）

（練習 2）コアラ親子とカンガルー親子がいます。〇〇さん、だれが抱っこしているのか、白くまさんに教えてあげてね。（グアー グアー）

1) マーさんがここにあるおもちゃについて説明するので聞いてね。黄色君はお誕生日にお父さんからミニカーをもらいました。黄色君はいつもいつもミニカーで遊んでいます。茶色くんはお誕生日にお父さんから新幹線をもらいました。茶色君はいつもいつも新幹線で遊んでいます。黄色君にはミニカーがあって、茶色君には新幹線があります。いいねえ。では、〇〇さん、「黄色君には何があり、茶色君には何がある」のかを白くまさんに教

えてあげてね。（グアー グアー）

（上記は「1. 黄色君にはミニカーがあって、茶色君には新幹線があります」のシナリオ。）



Fig.1 日本語勉強中の白くまさん



Fig.2 (19) の 1) で被験児に提示した場面



Fig.3 (19) の 2) 用の場面

2) マーさんがここにあるおもちゃについてお話しするので聞いてね。青さんはお母さんから宝石セットを買ってもらいました。青さんはいつもいつも宝石セットから綺麗なものを選んで身につけています。赤さんはお母さんから化粧品セットを買ってもらいました。赤さんはいつ

もいつもお化粧品セットを使ってお化粧品しています。青さんは宝石セットを持っていて、赤さんはお化粧品セットを持っています。いいねえ。では、〇〇さん、「青さんは何を持っていて、赤さんは何を持っている」のかを白くまさんに教えてあげてね。(グアー グアー)

(上記は「2. 青さんは宝石セットを持っていて、赤さんはお化粧品セットを持っています」のシナリオ。)

#### 4. 2 調査の結果

「所有者には所有物がある」文で使われるシナリオの後、助詞「には」が被験児により使用されるのか、「持っている」文が使われるシナリオの後「持っている」文が使用されるのか、「ある」文と「持っている」文において、使いやすさに違いがあるのか、提示された所有文に対して子どもが好む表現に言い換えられることがあるのかを考察する。被験児を Table 2 のようなグループに分け、まず、「ある」または「持っている」が使われたシナリオで、被験児がどのような動詞をどの程度の割合で使ったかを整理したものが Table 3 と Table 4 である(割合の出し方は Appendix 2 参照)。

Table 2. 被験児のグループ分け

A	6歳台	2人
B	5歳台	10人
C	4歳台	8人
D	2歳8ヶ月～3歳台	8人

Table 3. 「ある」文が使われた状況説明後、被験児が使った動詞の割合(%)

	持ってる	ある	動作動詞	状態動詞	なし
A	0	81.25	12.50	0	6.25
B	15	27.50	1.25	0	56.25
C	26.56	29.68	0	0	43.75
D	4.69	4.69	0	4.69	85.98

Table 4. 「持っている」文が使われた状況説明後、被験児が使った動詞の割合(%)

	持ってる	ある	動作動詞	状態動詞	なし
A	81.25	6.25	12.50	0	0
B	41.25	0	5	0	53.75
C	48.43	6.25	1.56	1.56	42.18
D	15.62	0	0	3.13	81.25

Aグループの6歳台は、動詞「ある」と「持っている」をそれぞれ使用できる。

BとCグループの4、5歳台は、「ある」文と「持っている」文が使われても、両方の場合で動詞を使わずに伝言することが半数程度であった。両者の異なった特徴として、

「ある」より「持っている」のほうが使いやすいようである。Table 4のように、「持っている」文が状況説明に使われている場合は、「持っている」文で伝言される場合が多い(「持ってる」をBグループが41.25%、Cグループが48.43%の割合で使用した)。Table 3のように「ある」文が状況説明に使われている場合は、「ある」文で伝言される場合があるが、「持っている」文でも多少伝言される場合がある(Bグループでは「ある」が27.50%、「持ってる」が15%、Cグループでは「ある」が29.68%、「持ってる」が26.56%の割合で使用された)。

また、上記のようにグループに言えることが個人に関しても同様に言うことができる。「ある」を使う状況説明で「持っている」を使用した被験児は10人であった。その状況で被験児の「ある」と「持っている」という動詞の使用回数は合計89回で、その内訳は「ある」が57回、「持っている」が32回、その割合は「ある」が64.04%、「持っている」が35.96%であった。「持っている」を使う状況説明で「ある」を使用した被験児が2人であった。その状況で被験児の「ある」と「持っている」という動詞の使用回数は合計92回で、その内訳は「持ってる」が87回、「ある」が5回、その割合は「持っている」が94.67%、「ある」が5.43%であった。

Table 5とTable 6は「ある」または「持っている」が使われたシナリオで、被験児が所有者に対してどのような格助詞をどの程度の割合で使ったかを整理したものである(所有物に対しての格助詞の使用割合は Appendix 3 参照)。

Table 5. 「ある」文が使われた状況説明において、被験児が使った所有者につく格助詞の割合(%)

	には	は	が	に	なし
A	87.50	12.50	0	0	0
B	15	38.75	13.75	0	32.50
C	17.18	53.13	1.56	0	28.13
D	4.69	9.38	0	0	85.93

Table 6. 「持っている」文が使われた状況説明での被験児が使った所有者につく格助詞の割合(%)

	には	は	が	に	なし
A	18.75	81.25	0	0	0
B	0	58.75	13.75	0	27.50
C	6.25	57.81	12.50	0	23.44
D	3.13	10.94	0	0	85.94

Table 5のように、「ある」文において、所有者につく格助詞「に」に関しては、どの年齢の子どもも使わなかった。Aグループの6歳台は「には」が使用できる。BとCグループの4、5歳台は、格助詞を使う場合は、「は」「には」「が」をその順で多く使っている。

Table 6 の「持っている」文では、A・B・C グループの 4 歳から 6 歳台で、「は」を多く使い、「が」「には」を使う場合もある。

調査から得られた結果を整理すると主に (20)(21) のような 3 パターンが観察された。それぞれに当てはまる人数、平均年齢、その年齢の内訳または幅は Table 7 と Table 8 である。

#### (20) 「ある」文

*a* グループ: 「ある」の使用回数 8 回のうち 6 回以上を使い、かつ、所有者に「には」または「は」を使い、所有物に「が」を使う幼児

*β* グループ: 「ある」と「持っている」の両方を合わせて 6 回以上を使う幼児

*γ* グループ: 「ある」と「持っている」の両方を合わせても 4 回以下しか使えない幼児

Table 7. 「ある」文の調査結果

	人数	平均年齢	内訳または年齢幅
<i>a</i> グループ	3	(5:9)	(5:6)(6:0)(6:1)
<i>β</i> グループ	7	(4:9)	(4:2)-(5:9)
<i>γ</i> グループ	18	(4:1)	(2:8)-(5:7)

#### (21) 「持っている」文

*a* グループ: 「持っている」の使用回数 8 回のうち 6 回以上を使う幼児

*β* グループ: 「ある」と「持っている」の両方を合わせて 6 回以上を使う幼児

*γ* グループ: 「ある」と「持っている」の両方を合わせても 4 回以下しか使えない幼児

Table 8. 「持っている」文の調査結果

	人数	平均年齢	内訳または年齢幅
<i>a</i> グループ	9	(5:1)	(4:2)-(6:1)
<i>β</i> グループ	1	(4:7)	(4:7)
<i>γ</i> グループ	18	(4:2)	(2:8)-(5:9)

Table 7 と Table 8 から二つのことがわかった。一つは、所有者が物を所有する場合、「ある」文は 5 歳 9 カ月、「持っている」文は 5 歳 1 カ月で使うことができるということである。もう一つは子どもの発話文から、「ある」文が使われる場面で、助詞「には」が使われるのかに関しては、約 5 歳 9 カ月で使用できるということである。

(22) は子どもが伝言した発話文の例である。(22a) は「ある」文も「持っている」文も両方使うことができる一番年少の T 児 (5:6) の発話文である。(22b)(22c) は「ある」文の「には」をまねずに「は」を使ったり、「ある」をまねずに「持っている」を使った TU 児 (5:9) と SU 児 (5:6) の発話文である。(22d)(22e) は調査では所有文をなかなか伝言できな

かったと思われる H 児 (3:3) と K 児 (3:3) の発話文である。

#### (22) a. T 児 (5:6)

1. 黄色君にはミニカーがある 茶色君には新幹線がある
2. 青さんは宝石セットを持ってる 赤さんはお化粧品セットを持ってる
3. 赤さんは食事セットがあって青さんはお皿セットがある
4. 茶色君はドラえもんを持って黄色君はメダルを持ってる
5. 青さんは食事セットを持って赤さんはお皿セットを持ってる
6. 茶色君にはメダルがあって黄色君にはドラえもんがある
7. 茶色君はミニカーを持って黄色君は新幹線を持っている
8. 赤さんには宝石セットがあって青さんにはお化粧品セットがある

#### b. TU 児 (5:9) \* 発話文の後の ( ) は筆者の記入情報である。

1. 黄色君はミニカーがあって茶色君は新幹線がある
2. 赤さんはお化粧品セットを持っていて 青さんは宝石セット持っている
3. 青さんは食器セットで赤さんは食べ物セット (「ある」文に対して)
4. 茶色君はドラえもんで黄色君はメダル (「持っている」文に対して)
5. 赤さんは食器で青さんはランチセット (「持っている」文に対して)
6. 黄色君はメダルを持っていて 黄色君はドラえもんを持ってる (「ある」文に対して)
7. 茶色君はミニカーを持って黄色君は新幹線を持ってる
8. 青さんはお化粧品道具を持って 青さんは宝石セットを持ってる (「ある」文に対して)

#### c. SU 児 (5:6)

1. 黄色君はミニカーがあって 茶色君は新幹線
2. 青さんは宝石セットを持って 赤さんはお化粧品セット
3. 赤さんはランチセットがあって 青さんは食事セットがある
4. 茶色君はドラえもんを持って 黄色君はメダルを持ってる
5. 青さんはランチセットを持って 赤さんは食器セットを持ってる
6. 黄色君はドラえもんを持って 茶色君はメダルを持ってる (「ある」文に対して)
7. 茶色君はミニカーを持って 黄色君は新幹線を持ってる
8. 赤さんは宝石セットがあって 青さんはお化粧品セッ

トがある

d. H 児 (3:3)

1. 新幹線持つてる茶色君
2. お化粧品セット 持つてるよ お化粧品
3. ごはんです
4. ドラえもん 持つてる
5. ごはん持つてるよ
6. ドラえもん 持つてるよ
7. 車持つてるよ
8. お化粧品あるよ お化粧品持つてるよ

e. K 児 (3:3) \*発話途中の ( ) は調査員の発話である。

1. 車と電車
2. 宝石セット これは (お化粧品セット)\* お化粧品セット
3. ごはんセットとお皿セット
4. ドラえもん あとこれなに (メダル) メダルメダル持つてる
5. ごはんセットとお皿セット
6. ドラえもんとお皿セット
7. 電車 車
8. セットとセット

以上、調査から明らかになったことをまとめると (23) になる。

(23) a. 「ある」文に使われる所有者につく助詞「には」は5歳9ヶ月ごろまでには使うことができるようになる。

b. 人が物を手に持ったり身に着けていないが、物を所有している場面で、「持っている」文を5歳1ヶ月ごろまでには発話することができるようになる。

c. 「ある」文と「持っている」文を両方使える場面では、4、5歳の子どもは「持っている」文のほうが使いやすい。

d. 「所有者には所有物がある」が使われた場面では、4、5歳の子どもは所有者につく格助詞は「には」より「は」や格助詞の省略のほうが使いやすい。

## 5. 考 察

これまでにみてきた自然発話資料と調査資料の分析結果をまとめると (24)(25) になり、a,b,c はその順で観察された。

(24) a. NP1 |に/には| NP2がある --- 存在 [場所に物がある]

b. NP1 は NP2がある --- 非典型的な所有関係 [生物とその属性の関係, NP1 と NP2 の関係性]

c. NP 1 |は/には| NP2がある --- 非典型的・典型的な所有関係

# 「NP1 に NP2がある」は観察されなかった。

(25) a. NP1 |が/は| NP2を持っている --- 携帯 [人間が物を携帯している]

b. NP1 |が/は| NP2を持っている --- 典型的な所有関係「ある」が使われた文の獲得過程では、2歳台から形式

は同様だが存在を表す文が所有文より早く多く発話される。そのとき、(24a)のように、場所を表すNP1につく助詞は「に」がよく使われた。大人の使用と同じく「は」は全く観察されなかった。その次の習得段階で、生物がその属性を具備しているような非典型的な所有関係が(24b)の形式で表される。その次の段階で、典型的な所有関係が(24c)で表されるようになる。この場合、大人の使用と異なり、所有者NP1につく「に」は観察されなかった。「持っている」が使われた文の獲得過程では、ある発達段階で物を手に持っていたり身につけたりしていることを表すために(25a)が使われる。その次の段階で、典型的な所有を表すために(25b)が使われる。

典型的な所有の概念はすぐに獲得されるものではないと考えられる。(24a)(24b)(25a)のように動詞の意味が存在や携帯などの具体的なもので使われ始める。NP1とNP2のそれぞれの意味内容と所有関係が非典型的なものから典型的なものまでが獲得されると、Myler(2016)の所有文の分析のように、大人の使用と同じく動詞の実質的な意味がなくなると考えられる。

(24)(25)でみた所有文の獲得過程の背後にはどのような法則がみられるのかを考察する。Fig.4のような生成文法理論に基づく言語獲得モデルを仮定する。言語獲得原理とは、経験と普遍文法の相互作用のあり方を規定したものと

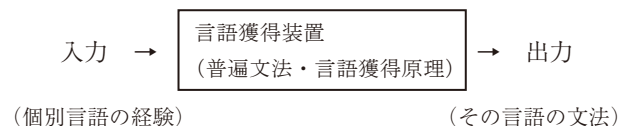


Fig. 4 言語獲得モデル

(26) OP(MAPPING): UNIFUNCTIONALITY: if you discover that a linguistic form expresses two closely related but distinguishable Notions, use available means in your language to distinctly mark the two Notions.

(Slobin 1985:1228)

(24a)から(24b)の過程は、Slobin(1985)の(26)に述べたような「子どもは形と意味の結びつきにおいて、1対1の結びつきを好む」という原則に基づくと考えられる。(26)のOPとは、Operating Principleの略語(動作[操作・作動]原理)で、言語を構築するための手続きのことである。Fig.4のモデルにおいては(26)は言語獲得原理として機能していると考えられる。ある獲得段階で(24a)のようなある物がある場所に存在するという意味と「に」を使った構文との結びつきが習得された後には、その結びつきでよく使われる。その次の段階で単なる存在だけでなく関係性などを表そうとすると、「に」を使った構文ではなく、(24b)のような「は」を使った構文が使われるようになる。

(24)(25)の習得過程には、習得過程のある段階の文法の特성에基づいて、次の段階の文法で所有文が可能となるよ



うな法則があるとみなしたほうがよいように思われる。その法則とは、普遍文法の内部構成を非瞬時的な動的過程として規定する動的文法理論の骨子となる法則 (27) の「もしある言語 L の習得段階 i の文法 G(L,i) の中に、P という特性が含まれているならば、同言語の次の習得段階 i+1 の文法 G(L,i+1) においては、P' という特性が可能である」というものである。その法則が意味と形式の結びつきに適用された場合が (28) となる。「ある習得段階で M' と F' が結びついていて、M は M' と密接な関係があるが、どの形式にも結びついていないなら、次の習得段階で、M は F' と結びつくことが可能である」というものである。

(27) If the grammar of a language L at stage i, G(L, i), has property P, then the grammar of the language at the next stage, G(L, i+1), may have property P'.

(Kajita 2002:161)

(28) If, in G(L,i), meaning M' is associated with form F' and meaning M, which is closely related to M', is not associated with any form, then M may be associated with F' in G(L, i+1).

(Kajita 2002:166)

この法則が所有文の獲得にどのように関与するかを考察する。(24c) の所有文の獲得時期の前段階の文法では、(24a) の「に」の存在文が可能である。(24b) の「は」の非典型的の所有文も可能である。(24b)(25b) の文を聞いたり使ったりしながら、典型的の所有の概念が獲得され、典型的の所有の概念には (1) で見たようなさまざまな特徴が含まれることが認識される。また、(24a) で表された存在や (24b) で表された非典型的の所有は典型的の所有の意味の一部を表したものであると認識される。典型的の所有の文を表そうとする段階になると、意味的に似ている「は」を使った構文と存在文で使われていた「には」「に」を使った構文が使われることになる。動的な内部構成を持つ普遍文法の理論に基づく、中間段階の文法の特徴が影響した結果として、大人の日本語文法では「{|に/には/は|}」を使った所有文が使われると考えることができる。また、存在文では「は」を使った構文は生じないという説明が可能となる。存在文が先に獲得され、その後になって所有文が獲得される。場所と所有の意味が密接な関連性があっても、ある習得段階で場所の意味が導入される時、その現段階の文法の特徴に基づいて形式が結びつく。その後の習得段階の所有文が可能となる文法の特徴には基づかないため、存在文では「は」を使った文は生じないことになる。

最後に、所有文の「人に NP がある」の「に」の獲得が遅い理由を考察する。その理由としては、日本語の所有文は、言語事象の観点で有標であるということが言える。八木 (1984:238-239) によると、ある構文を有標とみなす特徴とは、(i) 容認度が必ずしも完全ではない、(ii) 容認度の判断に個人差がある、(iii) 容認度がどの語を用いるかといった非構造的要因や文法外の語用論的要因などに影響されやすい、(iv) 対応する構文を持つ言語が比較的少ない、(v) 子どもによる習得の段階が比較的遅い、(vi) 通時的に不安定

である、というものである。(iv) の「対応する構文をもつ言語が比較的少ない」は Stassen(2009) を見る限りはそのようにいえないように推測されるが、その他の特徴は日本語の所有文にはあてはまる。

さらに有標であると考えられる特徴として、その構文の使用頻度が少ない。所有を表わし有標性の低い「持っている」文のほうが多く使用される可能性がある。また、文構造が表す意味が1つではない。所有文が、無標な(有標性が低い)存在文と文構造が同じである。

もう一つの理由としては、子どもの初期文法の特徴が考えられる。存在文で表される場所と「に」が強く結びついているということが言える。その言語現象の背後には、上述した one-to-one mapping(Slobin1985), the principle of contrast(Clark 1987) のような言語獲得原理が機能していると考えられる。このような原理が働き続けると所有者と「に」との結びつきの習得ができなくなってしまう。このようなことが習得過程のどの段階で起こり、何をきっかけとして子どもが利用できなくなるかは精査する必要がある。

## 6. 最後 に

本論文では、日本語の所有文に焦点を当て、典型的の所有を表す文を子どもから引き出す調査結果に基づき、所有文の獲得過程を考察した。調査により明らかになった点は以下の四つである。一つは、典型的の所有を表す「ある」文の所有者につく助詞「には」は5歳9ヶ月ごろには使うことができるようになる。二つめは人が物を手に持ったり身に着けたりしていないが、物を所有している場面で、典型的の所有を表す「持っている」文を5歳1ヶ月ごろには発話することができるようになる。三つめは「ある」文と「持っている」文が両方使える場面では、「持っている」文のほうが4、5歳の子どもは使いやすい。四つめは「所有者には所有物がある」が使われた文脈では、所有者につく格助詞は「には」より「は」や格助詞の省略のほうが、4、5歳の子どもは使いやすい。

さらに、上記の子どもの発話の誘出調査と松藤 (2015) の自然発話資料調査の両方の分析結果に基づき、日本語の所有文の獲得過程の特徴を明らかにした。そして、その獲得過程で (i) 所有の概念獲得、(ii) 「子どもは形と意味の結びつきにおいて、1対1の結びつきを好む」(Slobin 1973, 1985) という言語獲得原理、(iii) 獲得過程の中間段階の文法の特徴が大人の文法の特徴に影響を与えるという普遍文法の動的な内部構成 (Kajita 1977, 1997) が関与していることを議論した。

## Appendix

1) 調査で使ったフィラーは以下の3つである。

(F1) くまさんと豚さんがみんな座っています。だれが座っているか教えてね。

(F2) へびさんもかえるさんも体が長いです。へびさんと

かえるさんの体がどんなか教えてね。

(F3)へびさんが象さんの鼻を噛んでいます。へびさんが何をしているか教えてね。

2) Table 3 から Table 6 において、例えば動詞「ある」が使われているかの割合を出す場合は、「ある」動詞が一文に) 2個×(調査文(16)中に) 4文×(Table2からAグループに) 2人で合計16個、を100%とし、そのうち「ある」が13回使われたので82.15%となる。

3) Table 9 と Table 10 は、「ある」または「持っている」が使われたシナリオで、被験児が所有物に対してどのような格助詞をどの程度の割合で使ったかを整理したものである。

Table 9. 「ある」文の所有物につく格助詞の割合 (%)

	が	を	なし	他(で)
A	100	0	0	0
B	27.50	12.50	57.50	2.50
C	12.50	9.34	78.13	0
D	3.13	0	96.88	0

Table 10. 「持っている」文の所有物につく格助詞の割合 (%)

	が	を	なし	他(で)
A	12.50	68.75	18.75	0
B	0	40	57.50	2.50
C	0	28.13	71.88	0
D	1.56	1.56	96.88	0

## 謝辞

\* 本研究は平成 25 ~ 29 年度 JSPS 科研費基盤研究 (C) 「叙述的所有表現とその獲得に関する研究」(課題番号 25370561 研究者代表 松藤薫子) の助成を受けた研究成果の一部である。

本論文は、日本言語学会第 155 回大会での口頭発表「日本語を母語とする子どもの所有文の習得について」(2017 年 11 月 25 日) の内容に加筆・修正を加えたものである。発表後に西山佑司先生から、所有文は絶対存在文と密接な関係があるというコメントを頂いた。日本語の成人文法では、所有文(例:太郎には外車がある)は絶対存在文(例:太郎の外車がある)の変種とみなし、所有文の意味構造の基底に絶対存在文が含まれることが西山(2003, 2013)で提案されている。絶対存在文には連体的所有句(例:太郎の外車)が使われている。子どもの文法においても連体的所有句と所有文、絶対存在文と所有文に関係があるかどうかを今後確認したい。

調査に協力していただいた保育園の子どもたち、園長、保育士、スタッフの皆様にご心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- Brown, R. (1973) *A First Language: The Early Stages*. Harvard University Press.
- Clark, E.V. (1987) The Principle of Contrast: A Constraint on Language Acquisition. In B. MacWhinney (ed.), *Mechanisms of Language Acquisition*, 1-33, Lawrence Erlbaum
- Heine, B. (1997) *Possession*. Cambridge University Press.
- 池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会.
- 池内正幸(2010)『ひとのこぼの起源と進化』開拓社.
- 庵功雄 他(2012)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーネットワーク.
- Kajita, M. (1977) Towards a Dynamic Model of Syntax. *SEL* 5, 33-76.
- Kajita, M. (1997) Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language. In Ukaji, M., T. Nakao, M. Kajita, and S. Chiba eds., *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, Taishukan, 378-393.
- Kajita, M. (2002) A Dynamic Approach to Linguistic Variations. In Kato, Y. ed., *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, Sophia University, 161-168.
- MacWhinney, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk* (3rd edition). Lawrence Erlbaum Associates.
- Martin, S. E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- 松藤薫子(1992)「ある日本語習得児の観察記録 2才0ヶ月から2才9ヶ月まで」お茶の水女子大学大学院英文学会編、『えちゅーど』第22号, 117-130.
- 松藤薫子(1994)「英語を話す子どもにおける属格標識の習得について」お茶の水女子大学大学院英文学会編、『えちゅーど』第24号, 129-148.
- 松藤薫子(2012)「永続的所有を表す叙述表現に関する英語と日本語の比較:Stassenの類型論研究に基づいて」『日本獣医生命科学大学研究報告』61, 60-70.
- 松藤薫子(2014)「生成文法理論に基づく叙述的所有表現の一考察: 普遍的特性で規定されている部分と経験により獲得される部分」『日本獣医生命科学大学研究報告』63, 89-96.
- 松藤薫子(2015)「日本語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察」『日本獣医生命科学大学研究報告』64, 34-43.
- 松藤薫子(2016)「英語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察: 動詞 have 含む発話文の分析から」『日本獣医生命科学大学研究報告』65, 25-33.
- 松藤薫子(2017)「日本語の所有文の自然さに関する一考察」『日本獣医生命科学大学研究報告』66, 14-20.
- 宮田 Susanne 編 Brian MacWhinney 監修 (2004)『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』ひつじ

- 書房 .
- Myler, N. (2016) *Building and Interpreting Possession Sentences*. The MIT Press.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』 ひつじ書房 .
- 西山佑司編 (2013) 『名詞句の世界』 ひつじ書房 .
- Nisisawa, H. Y. & Miyata, S. (2009). Japanese – MiiPro – Nanami Corpus. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-473-7.
- 野地潤家 (1973-77) 『幼児言語の生活の実態 I ~ IV』 文化評論出版 .
- Noji, J., Naka, N., & Miyata, S. (2004). Japanese – Noji Corpus. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-058-8.
- Plaut, H. (1904) *Japanische Konversations-Grammatik mit Lesestücke und Gespräche*. Heidelberg: Julius Groos.
- Slobin, D.I. (1973) Cognitive Prerequisites for the Development of Grammar. In Ferguson, C.A. and D.I. Slobin (eds.), *Studies of Child Language Development*, Holt, Rinehart, and Winston.
- Slobin, D.I. (1985) Crosslinguistic Evidence for the Language-Marking Capacity. In Slobin D.I. (ed.) *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition Volume 2: Theoretical Issues*, Lawrence Erlbaum Associates, 1157-1256.
- Stassen, L.(2009) *Predicative Possession*. Oxford University Press.
- Taylor, J.R. (1996) *Possessive in English*. Oxford University Press.
- Tomasello, M. (1992) *First Verbs*. Cambridge University Press.
- Tsujioka, T. (2002) *The Syntax of Possession in Japanese*. Routledge.
- 八木孝夫 (1984) 統語論の有標性理論. 『言語』 1月号 . 大修館書店 .
-

## The Acquisition of Possessive Sentences in Japanese

Shigeko MATSUFUJI

Laboratory of the English Language Nippon Veterinary and Life Science University

### Abstract

This study examines the developmental sequence of the acquisition of Japanese possessive sentences based on cross-sectional experimental data from 28 Japanese-speaking children aged two years and eight months to six years and one month. Typical Japanese possession can be characterized by the following independent properties: The possessor is a human being; the possessed is an inanimate entity, usually a concrete physical object of value; the possessor has the exclusive right to use the possessed; the possessed is located near the possessor; and the possessive relation is long term. At least two constructions can express this relationship: X {*ni/wa/niwa*} Y *ga aru* 'X {a locative and/or topical particle or particles} Y a nominative particle *be*'; and X {*wa/ga*} Y *o motteiru* 'X {a topical or nominative particle} Y an accusative particle *have*.' Our findings are as follows:

- 1) Children can attach the particles *niwa* to the possessor NP in a typical possessive sentence at around five years and nine months.
- 2) Children can produce the verb *motteru* (a colloquial form of *motteiru*) in typical possessive sentences around five years and one month.
- 3) Four- or five-year-old children tend to use the verb *motteru* more than *aru* when they hear and imitate the possessive structure containing *aru*, while adults don't usually do so.
- 4) Four- or five-year-old children tend to use the possessor NP-*wa* or the possessor NP only (or the particle is omitted, which is different from adult usage) more than the possessor NP-*niwa*, when they hear and imitate the possessive structure: the possessor NP-*niwa* the possessed NP-*ga aru*.

Some characteristics are attested in the course of the development of Japanese language based on both this experimental study and Matsufuji's study (2015) which used naturalistic data. We argue that the acquisition of the concept of possession, a one-to-one mapping of form and meaning (Slobin 1973, 1985) and dynamic principles or developmental principles sensitive to the present grammar (Kajita 1977, 1997) can underlie the acquisition of possessive sentences in Japanese.

**Key words:** Possessive Sentences in Japanese, Child Language Acquisition, Dynamic Theories of Language

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **67**, 18-29, 2018.